

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02424

研究課題名(和文) 郷土史料を活用した戦国大名文芸の注釈と研究 上杉氏・武田氏を中心に

研究課題名(英文) A study of studies and annotations of the literary arts of the lords in the Warring States period

研究代表者

小川 剛生 (Ogawa, Takeo)

慶應義塾大学・文学部(三田)・教授

研究者番号：30295117

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：東国・北国の戦国大名・国衆の文学活動全般に関する史料を調査し、とくに今川義元の和漢聯句愛好について考察した。続いて大名の主催した歌会や和漢聯句の本文紹介や注釈を行った。新出の北条氏康主催の歌会本文を翻刻し、武田晴信の開催した世吉和漢聯句について、開催の背景、連衆の伝記を考察し、詳細な注釈を施した。中央から地方への学芸伝播の実態を考察した。さらに飛鳥井家・三条西家を対象に、東国に下向して活動した当主の活動と著作を跡付けた。こうした戦国大名・国衆の文芸の特色について考察し、学術論文として発表した。最後に、このことをテーマにした雑誌の特集「室町戦国の文芸と史料」を企画編集し刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

武田氏・北条氏・今川氏など、有力な戦国大名の文芸活動を新たな視点で研究した。とくに和漢聯句が、公家・武家・禅僧が同座して楽しむ文芸として流行したこと、これを妙心寺派の禅僧が指導したことを明らかにした。ついで地方で活動した公家である飛鳥井家や三條西実枝の影響を具体的に述べた。さらに大名の下で行われた歌会・和漢聯句の翻刻や注釈を刊行した。そこでは作者の作意を復原した。このことで、当時の鑑賞に従った理解が可能となり、戦国時代の文芸に関する議論を開始できる。また特集「室町戦国の文芸と史料」では、同じ研究を行っている文学・史学の研究者の寄稿を請い、成果の共有を実現した。

研究成果の概要(英文)：I researched the materials of the literary activities of the daimyo and lords of the Togoku(東国) region. First, I considered the significance of Yoshimoto Imagawa(今川義元)'s preference for the Wakan-renku(和漢聯句). Next, I introduced and annotated these poems and Wakan renku. In particular, I made a detailed commentary on the Wakan renku held by Harunobu Takeda(武田晴信). Furthermore, I considered the actual situation of the spread of scholarship and art to the Togoku region. For the Asukai(飛鳥井家) and the SanjoNishi(三條西家), I traced the activities and writings of the owner who went down to the eastern country. Finally, I considered the characteristics of the literary arts of the Sengoku daimyo and lords, and published it as an academic paper. And I planned and published a special feature of the theme magazine "Muromachi Sengoku literary arts and historical materials(室町戦国の文芸と史料)".

研究分野：日本文学

キーワード：和漢聯句 連歌 三條西家 今川義元 北条氏康 武田晴信 妙心寺派 古典学

## 1. 研究開始当初の背景

東国・北国の戦国史は、近年の歴史学では最も進展が著しい領域であろう。近世の軍記・系譜の類に依拠し、記述されていた歴史が、良質な一次史料の発掘と刊行に基づく実証的な研究によって、一新されたことが大きい。有名な武将の実名や家族関係さえ、旧説とはまったく異なることも珍しくない。そこでは地域権力への着目も重要である。戦国大名といっても一国を一元支配することは少なく、領国内に半独立の領主である国衆の存在を容認しており、そこでは安全を保障することで自身への奉仕を求める契約的主従関係にとどまっていた。

そして、この地方の大名・国衆は、歌人や連歌師を庇護し、伝統的な文芸をひとしく熱愛した。遺された作品は、主として、大名や国衆のもとで催された和歌・連歌・和漢聯句の一座(会の記録、そこで詠まれた作品)である。その紹介整理は、歴史学・国文学ともかなりの蓄積があるが、まだ埋もれているものが少なくない。とくに、東国・北国は史料も少ないことから等閑視され、国衆については注目された時期が近年であることから研究が立ち遅れている。また和漢聯句(漢和聯句も含む)は近年までほとんど関心を持たれなかったため、作品の所在さえつかめていない状態である。

東国では史料が比較的豊富である今川氏の文化に古くから関心が集中していたが、武田氏・北条氏にも独自の歌壇活動、あるいは連歌・和漢聯句の催しが確認され、一座の本文も残存する。さらに北国の上杉氏には、これまでほとんど注意されなかったが、二代景勝の時代には、家宰の直江兼続を実質上の主催者として、和漢聯句が頻繁に開催されていたことが判明し、会衆は当時一流の歌人・連歌師・禅僧たちをも交え、作品は和漢の知識を駆使し、たいへん高い水準にあることも分かって来た。

ここで深刻な問題がある。たとえ地方での催しが史料上に明記されていて、その本文が紹介されていても、作品研究が極めて稀薄であるため、しばしば偏見や牽強付会的な解釈が導き出されることである。明智光秀の開催した愛宕百韻が和歌会と誤解されることはまだしも、大名・国衆の和歌や連歌が、彼らの身の出来事とそのまゝ関連付けられて、あるいはさまざまな先入観や予断をもって解釈されて、議論を混乱させていることが少なくない。

これらはいくまで虚構の世界の美を求める文芸作品であるので、専門の文学研究者によって、その創作の意図を解き明かし、当時の鑑賞の手續きに従って、基礎的な解釈を示しておくことが絶対に必要である。その上で初めて、作品の外部の状況との比較対照も可能となって来るであろう。しかし、そこまで踏み込んだ業績は文学・史学ともいまだ見られないのが実情である。近年の歴史学の成果を摂取し、新たに知られるようになった史料を駆使して、東国・北国の大名・国衆の文芸を考え直す時期に来ていると言える。

## 2. 研究の目的

以下の3点が挙げられる。

- (1)戦国大名・国衆が遺した文芸作品、とくに和歌・連歌・和漢聯句の一座を集成し、整理し、詳しい注釈を施す。もって現代の読者にも作品を手に取りやすい形で提供する。
- (2)これまで知られていなかった大名・国人の文芸に係わる史料、あるいは作品をできるかぎり紹介する。とりわけ郷土史料を発掘し活用する。
- (3)中央から地方への学芸の伝播の状況を考察し、それを踏まえて、戦国時代の地方文化の実態、水準の高さ、多様性を実証的に明らかにする。

## 3. 研究の方法

以下の4点にまとめられる。

- (1)上杉氏・武田氏およびその領国の国衆、周辺の大名の文芸活動全般についての史料の調査と研究。とくに寺社所蔵史料と郷土史家蒐集の史料を含める。現在は所在不明であったり散逸しているものの、藩史・地誌などに収録されたり、自治体の地方史編纂にあたり書写・撮影された史料は、まだ数多く遺されているので、それらにも注意する。
- (2)戦国大名・国衆の主催した和歌会・連歌・和漢聯句について、新出のものを翻刻紹介する。あるいは重要なものは本文を校訂し、詳細な注釈を施し、作品の当時の理解と解釈の基盤を示す。
- (3)中央の学芸の地方への伝播の実態を究明する。ここでは、歌鞠を家藝とした飛鳥井家、古典学の権威であった三條西家を対象として、しばしば東国に下向して活動した両家の当主の活動・足跡を史料によって跡付ける。
- (4)武田氏・上杉氏・今川氏・北条氏などを中心に、戦国大名・国衆の文芸の特色について考察

し、学術論文として公刊する。さらにこのことをテーマにした雑誌の特集(「室町・戦国の文芸と史料」)を企画し、同じような研究を行っている国文学・歴史学の研究者の寄稿を請い、もって文学・史学にわたる成果の共有をはかる。

#### 4. 研究成果

この研究は、武田氏・上杉氏のみならず、隣接する北条氏・今川氏も含めた東国・北国の大名を対象とした。期間は5年間にわたっており、その成果は多岐に亘るので、分けて記す。

##### (1) 戦国大名・国衆による文藝の研究、特に歌会・連歌・和漢聯句の注釈・紹介

武田氏 武田晴信(信玄)膝下の積翠寺で催された、天文15年(1546)7月の世吉和漢聯句の唯一の伝本である積翠寺蔵本を調査し、「積翠寺蔵和漢聯句「心もて」注釈-天文十五年の武田晴信・三条西実澄・妙心寺派禅僧」を執筆、全句を詳しく注釈した(2020年12月)。なお、小山市立博物館所蔵、石塚文書のうちに残る、和漢聯句断簡を調査した。戦国期の原本で、おそらく信濃の諏訪氏と関係あるものと推定し、上記論文で簡潔に報告した。また、武田氏の文芸では三条西実枝との関係が注目される。やはり天文15年には実枝が勅使として晴信を訪問、甲斐国内のみならず、信濃の諏訪・善光寺などへ足を伸ばしている。その旅程を側近が記録した「甲信紀行の歌」を研究し、注解した。その原本は所在不明で、近代の転写本の福井久蔵筆本しか存しない。大阪市立大学附属図書館森文庫にもう一本が蔵されることを知ったので、書誌調査を行った。さらに、史料としての信憑性が盛んに論じられている甲陽軍鑑について研究すべく、刊本・写本の比較などの基礎的作業を進めた。

今川氏 今川氏文芸を考える上で和漢聯句もまた重要な柱と見て、集中的に研究した。今川義元と、その軍師と言われた太原崇孚(九英承菊)の作品から、その教養の特質を具体的に知ることができた。さらに二人の動きを支えた妙心寺派禅僧の動向を分析した。その成果として、「戦国大名と和漢聯句 駿河今川氏を中心にして」(2018年7月)、「今川文化の歴史的意義-和漢聯句を視座として」を執筆した(2019年5月)。この論文は、当該研究の成果をもとに、義元が主催、あるいは参加した和漢聯句(漢和聯句)の催し四度を取り上げて、その開催事情・連衆・句意などを整理し、その意義を述べたものである。これによって、和漢聯句がいかに大名・国衆に浸透していたか、また妙心寺派の東国・北国に延びた教線がこれを支えていたことなどが判明する。和漢聯句が戦国大名にとり、たんに文化的嗜好のみならず、朝廷・幕府との交渉や領国支配といった政治的な活動において重要な役割を果たしていたことを実証できた。和漢聯句の流行は、大名のもと、地域国家を構成する国衆・内衆、在国公家衆、禅僧が、教養・階層を異にしつつも、同座して交歓や交渉する機会を提供したこと、それにより戦国の文化が多様性をもって彩られていたことをも窺わせる。

あわせて、「今川氏と和歌-文学活動に長い伝統と実績を持つ家柄」(2017年6月)を執筆し、ここでは今川氏真を中心として、戦国大名の詠んだ和歌の鑑賞・評価に関してさまざまな視点から考えた。「室町期の武士と源氏物語」(2017年7月)では、中世武士の教養としての源氏物語について、その諸相を述べた。

小田原北条氏 小田原北条氏の文学関係史料について調査を進め、新出の飛鳥井雅綱・三条西実澄・北条氏康等詠草を閲覧撮影し、書誌を詳しく調査した。これは永禄三年(1560)秋、小田原で開催されたと推定される続歌会の一座であり、計16人の歌人が出詠している。初めて作品一座の全貌が知られる小田原歌壇の史料であることから、紹介と考察を兼ねて、「武士と和歌-題詠をめぐって」(2020年7月)、「氏康の教養と文芸」(2021年7月)など、北条氏康の文事に関する論文を2本執筆した。そして氏康の文事には三条西実枝が深く関わっており、源氏物語桐壺巻を講釈したことも三条大納言殿聞書の異本によって明らかになった。また、いわゆる戦国軍記の文事に関する記事がこれまで十分に考察されていなかったことを顧みて、北条五代記・異本小田原記について、戦国史料叢書の本文と、写本・刊本の本文とを比較して分析した。

上杉氏 上杉氏一門の武将であった三浦道寸の和歌事蹟を探索し、自筆歌書の断簡が多数残存するので、それらの古筆切を集成している。また、自筆にかかる続草庵和歌集が現存することを突き止め、くわしく書誌を調査し、「三浦道寸筆『続草庵和歌集』」(2018年3月)として報告した。なお、戦国大名の学芸を考察するのにも参考となることから、江戸初期の東北の大名の蔵書と学問の関係についても研究した。とくに弘前藩津軽家を対象に「將軍・大名による私家集の蒐集について」と題して講演を行い(2017年11月3日、於弘前大学)引き続いて津軽家旧蔵古典籍を追跡、成果を論文「津軽家歌道の源流-遺された歌書から探る」(2018年3月)、「大名の蔵書と学問-津軽信政の蔵書目録をめぐって」(2019年3月)としてまとめた。

##### (2) 京都から地方への学芸の伝播

この時期の飛鳥井家は、地方の大名・国衆に、しきりに歌道と蹴鞠を伝授していた。その活動を、各種の免許状の収集によって跡付けた。論文「戦国時代の文化伝播」の実態-十六世紀の

飛鳥井家の活動を通して」(2018年6月)を執筆し、これを当時の学芸の伝播の一典型として論じた。

続いて、古典学の権威であった三条西家と大名・国衆との関係を研究した。実枝(実世・実澄)と武田氏・今川氏との関係は、天文15年に初めて下向してから、20年以上にわたるので、論文「詩に「和韻」する歌-駿河在国期の三条西実澄」(2021年9月)で在国期の活動を考察した。まず、実隆作とされた「逍遙院内大臣和歌 詩和韻歌」が実は天正元年(1573)秋の実枝の詠草であり、内容は駿河在国期の生活を回想すること、かつ自筆断簡が国文学研究資料館に蔵されることを突き止めた。これを翻刻し、実枝の駿府下向と当地での活動は、臨濟寺の太原崇孚とその門下との交流が契機であったことを指摘した。ここに見られる、漢詩を和歌で唱和する、「詩和韻歌」と呼ばれる贈答形式が当時京都で愛用されていた。この形式は地方でも歌人と大名・禅僧との交流に際してしばしば用いられた。実枝が天文15年に武田晴信を訪ねた時も、晴信の詩に歌で和している。この形式を知ること、初めて晴信の詩も正しく解釈できる。

また戦国期には、武家が和歌を学ぶ入門書として、百人一首がクローズアップされた。それは地方をしばしば訪問していた連歌師宗祇の力が大きい。そのことに着目し、大名・国衆に宛てて執筆された、宗祇の百人一首注釈書の伝本研究を行った。論文「百人一首の「発見」-頓阿から宗祇へ」(2018年1月)を執筆した。さらに新出の百人一首宗祇抄伝本の影印を、解題とあわせて、『百人一首宗祇抄 姉小路基綱筆』(2018年4月)として刊行した。

### (3)学界に向けての論文集の編纂

この研究の総まとめとして、日本文学研究ジャーナル19号(古典ライブラリー)を末柄豊氏とともに編纂刊行した(2021年9月)。「室町戦国の文芸と史料」というテーマの特集を企画し、編者のほか、川上一・中野顕正・川口成人・萩原大輔・生田慶穂・川本慎自の六氏より論文を寄稿していただいた。日本文学・日本史の研究が相互に成果を参照した、これまでにない斬新な企画として反響を得た。

### (4)文献調査

博物館・特殊文庫・寺社・図書館への調査を実施した。主要な調査機関と日程は以下の通りである。川越市立中央図書館(2017年10月24日)、本居宣長記念館・西尾市立図書館岩瀬文庫(2017年11月23-25日)、弘前大学・弘前市立図書館(2017年12月16-18日)、小山市立博物館(2017年12月26日)、米沢市上杉博物館(2018年5月26日)、熊本大学附属図書館(永青文庫)・島原市立島原図書館(松平文庫)(2018年8月30日-9月1日)、備前正宗文庫(2018年11月7日)、九州国立博物館・九州大学附属図書館・祐徳稲荷神社・福源寺滴水文庫(2019年7月12日-14日)、川越市立中央図書館・遠山記念館(2019年10月1日)、京都大学(2019年11月23日)、上田市生島足島神社(2020年8月20日)、金沢市本龍寺(2020年9月3日)、甲府市積翠寺(2020年10月3日)、泰巖歴史美術館(2020年11月15日)、大阪市立大学附属図書館(2021年4月10日)。  
以上。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 77-7
2. 論文標題 武士と和歌-題詠をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 短歌研究	6. 最初と最後の頁 63-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 -
2. 論文標題 西行上人集の伝来	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『和歌史の中世から近世へ』	6. 最初と最後の頁 381-399
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 65
2. 論文標題 積翠寺蔵和漢聯句「心もて」注釈-天文十五年の武田晴信・三条西実澄・妙心寺派禅僧	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 三田國文	6. 最初と最後の頁 116 - 138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14991/002.20201200-0116	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小川 剛生	4. 巻 -
2. 論文標題 今川文化の特質-和漢聯句を視座として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『論集 今川義元』	6. 最初と最後の頁 66-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川 剛生	4. 巻 -
2. 論文標題 迎陽記の改元記事について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『年号と東アジア 改元の思想と文化』	6. 最初と最後の頁 53-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川 剛生	4. 巻 856
2. 論文標題 菟玖波集前後-後光厳天皇と二条良基	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川 剛生	4. 巻 117
2. 論文標題 頼阿句題百首の源泉-宋末元初刊の詩選・詩話・類書との関係を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 137-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川 剛生	4. 巻 241
2. 論文標題 柳営壺槐本をめぐる諸問題-编者・部類・成立年代	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 112-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 87
2. 論文標題 戦国大名と和漢聯句-駿河今川氏を中心にして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹島 一希 , 小川 剛生 , 河村 瑛子 , 大山 和哉 , 川崎 美穂	4. 巻 60
2. 論文標題 和漢聯句への招待	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 和漢比較文学	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 1
2. 論文標題 今川氏と和歌-文学活動に長い伝統と実績を持つ家柄	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 今川氏研究の最前線	6. 最初と最後の頁 216-283
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 15
2. 論文標題 室町期の武士と源氏物語	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 能と狂言	6. 最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 113-1
2. 論文標題 「河東」の地に住む人々-佐々木導誉と是法法師	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 219-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 1
2. 論文標題 百人一首の「発見」-頓阿から宗祇へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『人文知のトポス-グローバリズムを超えて あるいは「世界を毛羽立たせること」』	6. 最初と最後の頁 63-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 4
2. 論文標題 津軽家歌道の源流-遺された歌書から探る	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東奥義塾高等学校所蔵旧弘前藩古典籍調査集録	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 5
2. 論文標題 大名の蔵書と学問-津軽信政の蔵書をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東奥義塾高等学校所蔵旧弘前藩古典籍調査集録	6. 最初と最後の頁 9-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 小川剛生	4. 巻 19
2. 論文標題 詩に「和韻」する歌-駿河在国期の三條西実澄	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル(特集 室町戦国の文芸と史料)	6. 最初と最後の頁 86-102
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 2
2. 論文標題 氏康の教養と文芸	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『戦国大名の新研究2 北条氏康とその時代』	6. 最初と最後の頁 82-107
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 1
2. 論文標題 「戦国時代の文化伝播」の実態-十六世紀の飛鳥井家の活動を通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『中世学研究1 幻想の京都モデル』	6. 最初と最後の頁 115-134
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川剛生	4. 巻 22
2. 論文標題 三浦道寸筆『続草庵和歌集』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 三浦一族研究	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 小川剛生
2. 発表標題 称名寺における兼好-詠五十首和歌・和歌詠草（仮題）の考察
3. 学会等名 仏教文学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小川剛生
2. 発表標題 大名の蔵書と学問-津軽信政の蔵書をめぐって
3. 学会等名 弘前大学人文社会科学部 国際公開講座2018（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小川剛生
2. 発表標題 頼阿句題百首の源泉-宋末元初刊の詩集・詩話との関係を中心に
3. 学会等名 国際日本文化研究センター・共同研究集会「応永・永享期文化論」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川剛生
2. 発表標題 菟玖波集前後-後光厳天皇と二条良基
3. 学会等名 俳文学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小川剛生
2. 発表標題 「戦国時代の文化伝播」の実態 地方は中央に何を求めたか？
3. 学会等名 中世学研究会第1回シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小川剛生
2. 発表標題 戦国大名の文芸と和漢聯句
3. 学会等名 和漢比較文学学会大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小川剛生
2. 発表標題 迎陽記の改元記事について
3. 学会等名 国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小川剛生
2. 発表標題 将軍・大名による私家集の蒐集について
3. 学会等名 弘前藩藩校資料調査報告会（招待講演）
4. 発表年 2017年

## 〔図書〕 計6件

1. 著者名 小川剛生	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 192
3. 書名 徒然草をよみなおす	

1. 著者名 小川 剛生	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 352
3. 書名 二条良基	

1. 著者名 小川剛生ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 544
3. 書名 画期としての室町 政事・宗教・古典学	

1. 著者名 小川剛生	4. 発行年 2017年
2. 出版社 塙書房	5. 総ページ数 722
3. 書名 中世和歌史の研究-撰歌と歌人社会	

1. 著者名 小川剛生	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 258
3. 書名 兼好法師-徒然草に記されなかった真実	

1. 著者名 小川剛生	4. 発行年 2018年
2. 出版社 三弥井書店	5. 総ページ数 140
3. 書名 百人一首宗祇抄	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------